

●新シリーズ 市民記者が行く

山武市の地名あれこれ

①



地名は、その土地の地形や気候風土、歴史などを知る貴重な手がかりです。そこに住んだ人たちの営みを今日に伝える文化遺産といってもよいでしょう。山武市の地名の由来を2回にわたりリポートします。(市民編集準備委員会)

【山武市】

(さんむし) 市名の由来

となった山武郡は、1897年(明治11年)に山辺郡(東金市、旧成東町・山武町の一部、大網白里市、九十九里町)と武射郡(むしゃ)とも。旧松尾町、成東町・山武町の一部、蓮沼村、横芝光町、芝山町)の合併の際に山辺と武射から一字ずつとって誕生。山辺の地名は、奈良時代の万葉歌人・山部赤人が移り住んだことからつけられたという言い伝えがあります。

東金市の雄蛇ヶ池の近くに赤人の墓とされる「赤人塚」(写真・左上)や「赤人坐像」が祀られている法光寺があります。赤人塚には「田子の浦ゆうち出でてみれば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」の一首が刻まれています。

【成東】

(なるとう) 日本武尊が

東征の折、この地から見た太平洋の荒波にちなんで「鳴濤」(鳴戸)と名づけ、江戸時代には成東に改称されていたといえます。

また、ニュージールランドの先住民マオリ族の言葉で「波が洗っている場所」を意味する「ンガルトウ」が地名の由来という説があります。同じように、**作田川**は、マオリ語の「タクタ」(海岸に向かって突進する川)や「タクタイ」(海へ流れる川)から転じたといいま

す。真偽はともかく、太平洋を縦断して、マオリ族の人々がここにやって来て住み着いたとすると、雄大なストーリーを感じますね。

【松尾】

(まつお) 1869年(明治2年)に遠州・掛川藩がこの地に移転し、城を築いたことが地名の由来です。掛川藩士たちは掛川の居城を松尾城と呼んでいたことから、新しい土地にも「松尾」と愛着をこめて名づけました。松尾城は版籍奉還後の築城という全国でも珍しいケースです。松尾町大堤には、城の表門だったとされる長屋門が残っています(写真・左)。



【赤羽・赤羽根】

(あかばね) 松尾町豊岡地区に赤羽根や赤羽の地名

がつけられた一角があります。その地名は東京・北区の赤羽と同じ由来といわれています。関東平野

おすすめスポット お小柳夢さくら



木戸川右岸の小柳橋から中台橋までの約2キロに及ぶ桜並木。あまり知られていない山武の新生所です(写真は平成25年4月1日撮影)。

は富士山の噴火による火山灰が堆積したできた関東ローム層で、その表面が川などの浸食によって削られると、土地が赤く見えることから、「赤埴」と呼び、後に赤羽などの字が当てられたのです。

旧山武町の埴谷地区も同じで、埴土ある谷が由来といえます。この土は瓦や陶器、着物を赤く染める染料として利用されたよう

です。また、埴輪は埴土で作った人形や動物を墓の周りに輪状に並べたことから「埴輪」と呼ぶようになったとされます。

光さす秋は紅葉の唐錦大和の国は彩の中

半沢 今子

久々に曾孫と暮らす一日は驚き喜び部屋に満ちたり

鈴木 こう

畑の隅色とりどりの菊を植え見事に咲きぬ仏壇に供う

石田 邦夫

洗濯機共に暮らしし二八年今日も元気で我が家の宝

平山 美恵

同い年の親しき人の旅立ちよ遺影にしばし語りつづけぬ

巖 文子

命かけ抗議の狼煙の天安門赤の広場に真つ赤な炎

中村美津子

木犀は花の匂を吹き散らし道行く我に深呼吸させ

伊藤 初子

秋深みさ庭に小菊色どりて心なごます日々明け暮れ

麻生さち子

畦道にクローバー繁れり懐かしく地に膝折りて四つ葉探しぬ

北畠 光枝

半世紀無農薬野菜を作り来て猛暑の故か虫害に泣く

遠藤 直子

赤赤と燃える紅葉をながめつつ孫の夢聞く日だまりの縁

京相 恵子

身に迫る老いの兆しかペンダントの金具外せず灯火に喘ぐ

木内 栄子

冷える朝ジャツジャツと鶯の師走の庭に春を待つがに

富谷 治代

ばら園に行く二十五キロのこの道は息子の勤務する学校への道

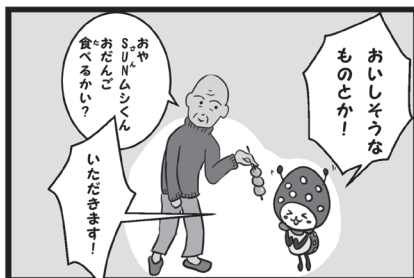
岩沢 静枝

高齢の我が生方は如何にせん出来得るかぎり自分でなすよ

鈴木 治子

SUNムシくんの4コマ漫画の掲載が始まるよ。

さん たかめ SUNムシくんの宝さがし



これから一年間、SUNムシくんと一緒に山武市の魅力を見つけましょう
【作者:千葉大学 デザイン文化計画研究室】

▼千葉大学の学生が地域キャラクターが果たす役割を研究テーマにキャラクターが、市の魅力などを紹介する4コマ漫画の掲載をすることになりました。